

中学校特別支援学級在籍生徒を対象とした 就労支援講座の実践報告

—市の福祉部門と学校との連携による キャリア発達支援の試み—

- 榎本 容子 (独立行政法人国立特別支援総合研究所 主任研究員)
- 小田切 めぐみ (南アルプス市役所 こども応援部こども家庭センター
途切れのない支援担当)
- 石本 直巳 (独立行政法人国立特別支援総合研究所)
- 北村 拓也 (独立行政法人国立特別支援総合研究所)
- 相田 泰宏 (横浜市教育委員会事務局)

1 はじめに

(1) 問 題

- 障害のある若者の中には、学校卒業後に進学や就労を果たしながらも、進路先の環境に適応できずに中退や離職に至り、社会的に孤立するケースがある。
- 就労上の困難の背景には、仕事をするうえで重要となる力や、職場のルール等に対する理解(**仕事理解**)の困難さや、自分の特性や得意なこと・苦手なこと、自分に必要な配慮等に対する理解(**自己理解**)が十分に育っていないことなどが考えられる。
- こうした課題に対応するためには、学校段階から将来の社会的・職業的自立を見据え、発達段階に応じて**段階的にキャリア発達を支援する取組**が求められる。

<キャリア発達とは>

社会の中で**自分の役割**を果たしながら、**自分らしい生き方**を実現していく過程

(1) 問 題

- このような取組を進めるうえでは、生徒一人ひとりの発達段階や障害特性に応じた多様な学びの機会を用意するとともに、**職業体験や地域での体験活動**を通じて、**仕事に対する具体的なイメージ**を育むことが重要である。
- また、仕事をするうえで共通して求められる基本的な力や姿勢は、学校や**地域での学びの中**でも育むことができるため、これらと関連付けながら気づきを促す視点が求められる。
- さらに、**自分らしく働くために必要な配慮**について考える機会を意図的に設定することも重要である。
 - ➡特に中学校段階は、「現実的探索と暫定的選択の時期」であり、将来の職業や進路に対する見通しを持ち始める重要な時期。**仕事や自己について考える機会を意図的に設けることの重要性**
- しかし、中学校の特別支援学級では、**障害特性に応じた体験的なキャリア教育を継続的かつ計画的に提供することは容易ではない状況。**

(1) 問 題

課題の解決に向けた参考事例として、南アルプス市における「就労支援ワーク」の取組がある。

<就労支援ワークについて>

市の福祉部門と学校が連携し、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する中学生を対象に実施されている。年に一度の開催を通じて、生徒が将来の就労について考えるとともに、仕事や自己への理解を深める機会を提供することを目的としている。

<これまでの活動>

- ・市内の事業所(消防署、市のリサイクル事業部、コンビニエンスストア、カーディーラー等)における就労体験を中心に展開されてきた。
- ・生徒が実際の職場に身を置くことにより、仕事に対する具体的なイメージを深めたり、関心を高めたりするうえで、重要な学びの機会となっていた。
- ・一方で、体験を通し、仕事理解や自己理解を深めたり、また、それを学校での学びと関連付けたりすることについては課題が残されていた。

(2) 本報告の目的

令和5年度から6年度にかけて、当研究所キャリア班メンバーが参画し、仕事理解及び自己理解に関する学習上の課題を踏まえた就労支援講座の内容案を、市の福祉部門及び学校と連携して検討した。



本報告では、

令和6年度に、障害のある中学生を対象に検討された、

①仕事の意義やポイントを伝える動画教材

②ピッキング、数値チェック、組立作業による模擬的な仕事体験

③学習・体験前後に実施する「自己発見ワーク」等による、

仕事理解と自己理解を促す学習の内容を紹介するとともに、
地域資源を活用したキャリア発達支援の今後の課題について述べる。

2 検討された活動及び教材の内容

(1) 学習のねらい

動画教材や仕事の模擬体験を通して、

- ①自分に合った仕事や、②そのための進路について考える機会をもち、さらに、仕事をするうえで大切なポイントを知ることを通じて、
- ③自分の得意なことや苦手なことに関心を深め、仕事理解や自己理解を促すことをねらいとした。

(2) 動画教材

「仕事博士」というキャラクターが登場し、生徒が将来の就労について考えるための「秘伝の技」を授けるというストーリーで展開される。
内容は、「仕事を知る」と「自分を知る」の2部構成である。



(2) 動画教材

<「仕事を知る」パート>

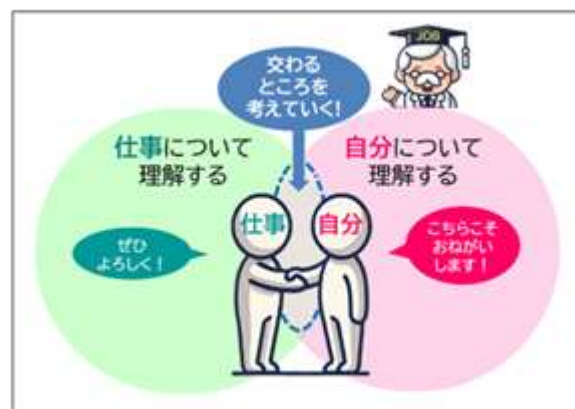
- ・「働く」とは社会の中で自分の力を発揮し、他者や社会に貢献することであると説明した。
- ・「はたらく＝人が動くことで、はた(周囲)も楽になる」といった言葉を用いて、働くことの本質を伝えた。
- ・パン屋、農家、物流スタッフなど多様な職業を取り上げ、社会に存在するさまざまな仕事への理解を促した。
- ・そのうえで、「仕事をするうえでの5つのポイント(①話を集中してよく聞き、仕事内容を理解する／②集中して正確かつ丁寧に取り組む／③わからない時は質問、困った時は相談、終わったら報告をする／④気持ちの良い態度で人と関わる／⑤たすけあう)」を示した。
 - ➡令和5年度までの取組で協力を得た市内の事業所7か所から仕事をする際に重要となるポイントを聴取し、そこから抽出された共通点を整理し作成。

(2) 動画教材

<「自分を知る」パート>

- ・適職を見つけるためには、仕事理解と自己理解の重なりを意識することが重要であると説明。
- ・そのうえで、自己理解に必要な視点として、「好きなこと・得意なことを見つけること」と「苦手なことを把握し、工夫や配慮で対応すること」の2点を示した。

全体としては、キャラクターや図・イラストなどの視覚的要素を活用し、学習への興味を高める工夫を施した。



(3) 仕事の模擬体験

模擬体験は、「①チームでのピッキング体験」と「②個人作業体験」の2つで構成した。

<①チームでのピッキング体験>

- ・「協力して仕事をやり遂げよう！～チームでピッキング体験～」と題し、役割に分かれて文具や雑貨のピッキングから梱包、報告までの作業を協力して行う内容とした。
- ・各生徒は、リーダー、文具・雑貨のピッキング担当と検品係、梱包担当、梱包確認・報告係のいずれかの役割を担い、工程ごとに連携しながら作業を進めた。



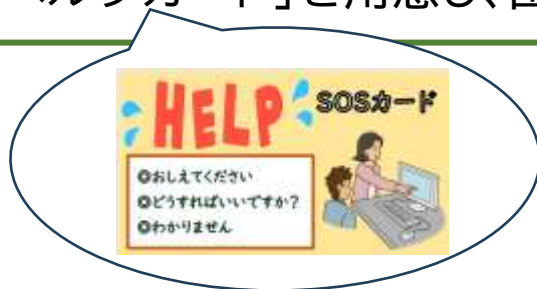
(3) 仕事の模擬体験

- ＜②個人作業体験＞ ＊障害者職業総合センターのワークサンプル幕張版を活用
- ・「集中して仕事をやり遂げよう～個人作業体験～」と題し、生徒が自分の特性や興味に応じて、以下の個別作業のどちらかを選択し、集中して取り組む内容とした。

数値チェック：請求書と納品書を照合し、誤りを修正する作業。注意深さが求められる。

プラグ・タップ組立：作業指示書をもとに部品を組み立てる作業。手順理解と手先の操作が求められる。

- ・①及び②の活動時には、「仕事をするうえでの5つのポイント」を意識して取り組むよう生徒に伝えるとともに、教員や市の職員が声かけを行った。
- ・また、「ヘルプカード」を用意し、困ったときには自ら援助を求められるよう促した。



(4) 自己発見ワーク・自己再発見ワーク

本ワークは、苦手なことを自覚し、相談したり配慮を求めたりすることの重要性を、生徒に伝えることを意図して構成した。

<自己発見ワーク>

- ・模擬体験の前に実施し、「仕事をするうえでの5つのポイント」について、自分がどの程度実践できそうかを事前に考える形式とした。
- ➡これにより、自分の得意なこと・苦手なことを意識化する機会とした。

5つのポイントについて、
学校生活の状況と関連付
けた例示を提示

自己発見ワーク		あなたはどのくらい「アイ・ウ・エ」を身につけていますか？			
仕事をする時、5つのポイントについて、どの程度実践できそうか、考えましょう。		アイ（実践が得意な点でも困難なくできる）	ウ（実践が得意な点でも困難なくできる）	エ（実践が得意な点でも困難なくできる）	？（よくわからない）
① 話を聞かせてよく聴く、相手の話を理解する	アイ：相手の話をよく聴く、相手の話を理解する。 ウ：相手の話をよく聴く、相手の話を理解する。 エ：相手の話をよく聴く、相手の話を理解する。 ？：相手の話をよく聴く、相手の話を理解する。	アイ	ウ	エ	？
② 集中して、正確かつ丁寧に働く	アイ：集中して、正確かつ丁寧に働く。 ウ：集中して、正確かつ丁寧に働く。 エ：集中して、正確かつ丁寧に働く。 ？：集中して、正確かつ丁寧に働く。	アイ	ウ	エ	？
③ 自分から積極的に働き、困った時は相談、自分から報告する	アイ：自分から積極的に働き、困った時は相談、自分から報告する。 ウ：自分から積極的に働き、困った時は相談、自分から報告する。 エ：自分から積極的に働き、困った時は相談、自分から報告する。 ？：自分から積極的に働き、困った時は相談、自分から報告する。	アイ	ウ	エ	？
④ 相手の話をよく聴く、相手の話を理解する	アイ：相手の話をよく聴く、相手の話を理解する。 ウ：相手の話をよく聴く、相手の話を理解する。 エ：相手の話をよく聴く、相手の話を理解する。 ？：相手の話をよく聴く、相手の話を理解する。	アイ	ウ	エ	？
⑤ 助けを求め、協力する	アイ：助けを求め、協力する。 ウ：助けを求め、協力する。 エ：助けを求め、協力する。 ？：助けを求め、協力する。	アイ	ウ	エ	？

(4) 自己発見ワーク・自己再発見ワーク

<自己再発見ワーク>

- ・模擬体験の後に実施し、5つのポイントの実践状況や、自分に必要な配慮について考える機会とした。
- ➡体験を通じた「仕事理解」に基づく、「自己理解」の深化がねらい

自己再発見ワーク

自己発見は、知識をとおして得るものじゃ！
知しも知平なこころがある。自分の得意なことや得意なことを知って、実際に
経験したり、想像を働かせてみることで分かるんだよ！

1. 仕事をすると、「5つのポイント」をどの程度実践できたか、思い出しましょう。

質問	ア 言葉かけ等がなくても 実践できた	イ 言葉かけ等があれば できた	ウ 言葉かけ等があっても 難しいことがあった	エ よくわからない ？
① 話を集中してよく聴き、仕事内容を理解する。	ア	イ	ウ	？
② 集中して、邪魔かつた事がない	ア	イ	ウ	？
③ 分からない事は質問、困った時は相談、終わった後確認する	ア	イ	ウ	？
④ 気持ちのよい態度で人とかわる	ア	イ	ウ	？
⑤ 助け合う	ア	イ	ウ	？

2. 調音の中で、「配慮」をしてもらえてよかったことを思い出しましょう。

質問	ア かなりそう思う	イ どちらか思う	ウ そう思わない	林に配慮はしてもらって ない/よくわからない ？
① ゆっくり説明してもらえてよかった	ア	イ	ウ	？
② 言葉やイラストなどを使って詳しく説明してもらえてよかった	ア	イ	ウ	？
③ やることについて家賃や手帳を覚えてもらえてよかった	ア	イ	ウ	？
④ わからないとき、困ったときに、声をかけてもらった、相談に乗ってもらった、思い出してよかった	ア	イ	ウ	？
⑤ 今の自分の成長を聞いてもらえてよかった	ア	イ	ウ	？

3. 発見になったこと、心に残ったことなどがあれば、メモしておきましょう。(書き書き)

仕事について(仕事をする時に大切なポイントなど)	自分について(自分の得意・不得意など)

(5) 学校での学びとの関連付けの工夫

就労支援ワークへの参加は、学校では「自立活動」の時間として位置付けられている。
このため、教員と共有する活動展開案においては、**キャリア教育の視点**のほか、
「自立活動」における自己理解に関する内容との関連を示した。

➡具体的には、「健康の保持(障害の特性の理解と生活環境の調整)」及び「人間関係の形成(自己の理解と行動の調整)」との関連を示し、模擬体験や振り返りを通じて、
自分の特性が作業遂行に及ぼす影響や、**集団内での行動調整を体験的に学ぶ機会**となることを示した。

<参考>

◆自立活動の内容と、本講義との関連（※下線は本講義でテーマとする「自己理解」に関わる項目）

関連項目	項目の内容	講義内容
「1 健康の保持」 (4) 障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること。	「(4) 障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること。」は、自己の障害に <u>どのような特性があるのか理解し、それらが及ぼす学習上又は生活上の困難についての理解を深め、その状況に応じて、自己の行動や感情を調整したり、他者に対して主体的に働きかけたりして、より学習や生活をしやすい環境にしてい</u> くことを意味している。 今回の改訂では、自己の障害の特性の理解を深め、自ら生活環境に主体的に働きかけ、より過ごしやすい生活環境を整える力を身に付けるために必要な「障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること。」を新たに示すこととした。	・模擬的体験と振り返り（感想のシェア、自己発見ワーク等）を通じた、 「自分の特性が仕事の遂行に及ぼす影響の体験的理解」 「自分が不得意なことへの対応（補完手段の活用や、他者への配慮要請等）の体験的理解」 ※自身の障害特性への気づきの「芽生え」のきっかけとするものであり、障害理解を取り扱うものではない。
「3 人間関係の形成」 (3) 自己の理解と行動の調整に関すること。	「(3) 自己の理解と行動の調整に関すること。」は、 <u>自分の得意なことや不得意なこと、自分の行動の特徴などを理解し、</u> 集団の中で状況に応じた行動ができるようになることを意味している。	

3 成果と今後の課題

- 生徒は、動画教材と模擬体験を組み合わせた学習を通して、抽象的な概念としての「働くこと」を自分ごととして捉え直す機会を得た。
- また、教員にとっても、本取組は学校教育との接続を意識する契機となった。
- 一方で、その客観的評価や効果的な方策の検討においては、なお課題が残されている。
- 今後は、こうした課題の改善を図りつつ、地域資源を活用し、持続可能な形で本取組を継続していくことが求められる。
 - ・地域資源で負担なく運営可能な講座としていくことが重要。
 - ・単発的な学びとならないよう、学校教育のねらいと関連付けて活動設定を行い、学校での振り返り学習につなげやすくすることが重要。
 - ➡令和7年度の実践では、特別な機具を用いずに実施できる模擬体験へと調整中。講座終了後に学校で活用できる振り返り教材も導入予定。